

飼料用米（玄米）の配合割合の違いが 肥育豚の発育および肉質に及ぼす影響

わが国の畜産は海外からの輸入飼料に大きく依存しており、昨今の輸入穀物価格の大幅な変動や高止まりは養豚経営に大きな打撃を与えています。現在、国産飼料の増産を推進し飼料自給率の向上を図ることが重要な課題となっており、千葉県内では飼料用米の作付け面積が年々増加しています。そこで、飼料用米を肥育豚飼料として効果的に活用するため、飼料中の玄米の配合割合の違いが肥育豚の発育と肉質に及ぼす影響を明らかにしました。

☆ 技術の概要

1. 玄米の飼料中の配合割合を0%（対照区）、15%、35%、70%とする試験区を設け、各区LWD3元交雑豚10頭を供試して、体重70kgから飼料の給与を開始しました。飼料用米は千葉県市原市で収穫された「べこあおば」の玄米を用い、2mmメッシュで粉碎しました。
2. 1日平均増体量、飼料摂取量、飼料要求率および110kg到達日齢などは玄米の配合割合に影響されませんでした。
3. と体の背脂肪、ロース断面面積および水分含量、加熱損失およびせん断力価等の肉質成績は玄米の配合割合に影響されませんでした。
4. 背脂肪内層の脂肪酸組成は、玄米の配合割合が増えるにつれて不飽和脂肪酸が減少する傾向が認められ、特にリノール酸が減少しましたが、融点については差がありませんでした。



写真1 試験区別ロース断面

上段:左 対照区 右 15%区

下段:左 35%区 右 70%区

☆ 活用面での留意点

飼料中に70%配合しているトウモロコシの全量を玄米で代替しても肥育豚の発育に差は認められませんでした。栽培条件等により粗タンパク質含量に違いがあるので、飼料分析を行い、必要に応じて他の飼料原料で調整してください。詳細は、千葉県畜産総合研究センター・養豚養鶏研究室 高橋圭二(TEL:043-445-4511)にお問い合わせください。

(日本政策金融公庫 農林水産事業本部 テクニカルアドバイザー 加茂幹男)